

おじさんの青春日記（その2）

合衆国陸軍軍曹

マスダカズオ（二）

〈アンツィオ上陸記念博物館〉

イタリア国アンツィオ市
『アンツィオ上陸記念博物館』館長
パトリツィオ コランツィオーノ様あて書簡

一九九七年四月三十日付け、貴方からのご丁寧なお便りを頂戴いたしました。ありがとうございます。ございました。

先日は私と友人たちが、何の前触れもなく貴博物館をおたずねしたにもかかわらず、貴方やスタッフの皆様に変々ご親切にしてくださいましたこと、深く感謝しております。

日本からローマに到着した私は何をにおいても先ず最初に、アンツィオの町を訪れたいと思つたのです。

何のあてもなくアンツィオの港を徘徊したのち、ローマに引き上げようとしていた私たちに、町の人が願ってもない情報を教えてくれました。一九四四年の連合軍によるアンツィオ上陸作戦の資料を展示した博物館が、町のはずれにあるということです。夕闇が迫り、雨のなかを私たちは大急ぎで車を走らせました。

五十三年前の一九四四年五月、アメリカ・ミシシッピの港を輸送船で発ったマスダカズオたち日系人四四二部隊は、ひどい船酔いに悩まされながら大西洋を横断し、ジブラルタル海峡を抜けて地中海に入りました。ドイツ海軍潜水艦の魚雷におびえながら、劣悪な二十一日間の航海のちアフリカ大陸北端・オランに入港。

近海の制海権は連合軍がすでに掌握していたとはいえ、ドイツの戦闘機が時折上空に飛来するような状況でした。カズオたちは、アンツィオの港にイタリア本土での第一歩をしるしたのです。

私たちがアンツィオの埠頭に立つたのは、地中海から吹き込む雨まじりの冷たい風の吹く日曜日でした。打ち寄せる地中海の波音が間近に聞けるアンツィオの町は、今はのどかなりゾート地。港を見下ろす斜面にはコロニアル風の別荘や、意匠を凝らしたマンションが南国の樹木の間立ち並んでいます。

半世紀前、今は風景画のように美しいこの港をめぐつて、連合国と枢軸国とが地中海を血で染める大激戦を展開したことは、貴方の上陸記念博物館に展示してある当時の資料や遺物を見るまでは、容易に信じることができませんでした。その攻防戦はマスダカズオがアンツィオの港に上陸する、わずか五ヶ月前の出来事です。

(*)アンツィオ上陸作戦

ドイツ、イタリア枢軸軍への猛烈な反撃を繰り返した米国、英国などの連合軍は、一九四三年七月シチリア島を制圧。翌年一九四四年一月二十二日イタリア・ローム南八十キロの軍港アンツィオに奇襲上陸作戦を敢行。連合軍は一週間で兵力六万九千人、火炮五八門、戦車二三七両はじめ、大量の補給物資を揚陸。迎撃するドイツ軍の反撃はすさまじく、連合軍はわずか三日間の上陸作戦で五千五百名の死傷者をだすという被害を受け、アンツィオの住民も多くが犠牲となった。この年六月に行なわれたフランス・ノルマンジー上陸作戦と並び、戦史に残る大上陸攻防戦であった。この後六月四日、連合軍はローマに入城。ドイツ軍は撤退につぐ撤退を余儀なくされる。

パトリツィオ館長はじめ有志の皆様が、それぞれご自分の仕事をやりくりしながら、あの壮大な博物館を無給で運営されていることを知り、驚くとともに私は深い感銘に浸りました。

博物館を守り続けるスタッフの皆さんは、パトリツィオ館長をリーダーに十四人。年金生活者、銀行員、商店主。六十代、七十代とおぼしき方々が、当たり前のごとく博物館を愛し、それぞれの役割を真摯に果たそうとされている姿を拝見して、私は儀式を執り行う司祭を見ているような感慨を覚えました。

社会人としての責務の過半を終えた人々が、ゆったりと、この博物館を生きがいに、残りの半生を送ろうとされていることが、私にはひしひしと伝わってきました。老いに向かう人間の、ひとつのありようを教えてもらったような気持ちでした。

アンツィオの町の中心近く、緑に囲まれた典雅な博物館は、前庭に砲弾や軍用機のプロペラが展示されていなければ、美術館と見まごうほどです。

私と藤川君はローマに着いて以来、街中にあふれる遺蹟や街なかの細部にまで行き届いた意匠の素晴らしさに興奮して、深夜まで語り合っていました。

藤川君は私と同じ広島市内の生まれ。二人が大学生の時、初めて知ったことなのですが、彼と私は偶然同じ小学校の出身でした。私たちの小学校は、原子爆弾の爆心地にもっとも近い小学校でした。原爆が投下された一九四五年八月六日朝、小学校にいた私たちの先輩二百十八名は、頭上を襲った原子爆弾の火球に包まれました。

藤川君は美術大学を卒業し、現在は東京でも有数のグラフィックデザイナーとして活躍しています。私は法学部の学生の頃、彼の大学によく遊びに行っていたものです。

ある日、彼らの教室の扉を開けたとき、私の目に飛び込んできたのは、白昼、教室の中央に立つ全裸の女性でした。学生たちは熱心にデッサンを続けていますが、私は呆然とその場に立ちすくんでしまいました。

論理に呪縛（じゅばく）された世界にいた私は、彼らの棲む「創造と美」の広野は自由極まりなく、別世界のように果てしなく思えました。当時、東京の大学を嵐のように襲っていた、学生と体制権力との争いもここには無く、学生たちは平和な学園で悠然と制作に携わっていました。

藤川君とイタリアを旅する間じゅう、行く先々で彼は古代から現代にいたるイタリア美術とデザインについて語り続けました。アートに疎い私にとって、これ以上ない最良の旅のパートナーでした。限られた日程のなかで、彼は念願の美術館めぐりを犠牲にしてまで、アンツィオに同行してくれたのです。

私たちが上陸記念博物館を訪れた日は、偶然にもイタリア終戦記念日を控えた特別な催しが行なわれていた日。博物館のなかは市民でごった返していました。

若いカップルが手をつないだまま、展示してある上陸米国兵の手帳や、ドイツ兵の遺品を、黙って、熱心に見入っている姿がとても印象的でした。

一九五一年、アンツィオに生まれたパトリツィオ館長はことし四十六歳。

首都ローマで自治体の予算立案を担当する公務員職のかたわら、自宅のあるアンツィオ市の「アンツィオ上陸記念博物館」館長にボランティアとして就任されました。若くして戦争に命を捧げた数多くの兵士に今も尊敬の念を抱き、現代の若者に歴史の重みを伝え続けるために、みずから発起人として「アンツィオ上陸記念博物館」を設立されました。わずかな公的援助では賄（まかな）えず、スタッフの皆さんが月々一萬リラ（約七百元）ほどを積み立てし、施設の整備にあてておられるとか。

館長は私にこう語りかけました。

「私の両親達は戦争前からアンツィオ市内に住んでいました。しかし、連合軍上陸作戦に先立つ一九四三年十月十九日、米英軍による激しい無差別爆撃で当時の家は跡形も無くなるほど破壊されてしまいました。当時、五、六千人いたアンツィオの住民すべては奥地の森に避難し、バラック生活を強いられました。この生活はローマが解放されるまで続きまし。私の母は戦後生まれの幼い私に、この時の悲惨な状況をことあるごとに語り続けました」

館長のお母様が戦争中に受けた心の傷は、一生お母様の感受性を支配して、体験した事実を息子に語り伝えることで、その傷を少しでも癒そうとされたことが私には容易に理解できません。

第二次世界大戦の後、広島に生まれた私が、戦争前後のさまざま出来事に関心を持ち、現在も仕事の合間に当時の記録を集め続けているのも、思い起してみれば一九四九年（明治四十二年）生まれの私の母から、戦争や広島原爆にまつわる悲劇を、幼い頃からくり返し聞かされて育ったことが動機になっていいるのかもしれない。

母は自分の兄弟や親族の多くを奪ったこのたびの戦争について、国民のなかで十分な総括がなされていないこと。そのことが戦後の日本人の精神形成に大きな影響を与えているという意味のことを、違った言葉でつぶやいていました。

幼ない頃、いやがる私に母が乾布摩擦と引き換えに軍歌を歌ったり、戦争中の体験を話していたことを、母は晩年まで懐かしそうに話していました。目をそむけず、歴史をさまざまな角度から直視すること。人間の罪深い過ちを後世に語り継ぐこと。

パンを得るために生きる日々でなく、このことは、とりわけ悲劇の舞台に生まれ育った者にとっての責務とも、今になって考えるようになりました。

戦場という極限地で、人間が動物にも劣る卑しさをみせ、神仏にも値する崇高な行動を示すことができることを、私は多くの記録のなかに読みとつてきました。

「人間とはなにか」。この問いは、私にとって今も昔も変わらぬ、生涯の難問であり続けます。

あなたに見送られてアンツィオ上陸記念博物館を辞したのち私たちは、一九四四年八月二十八日フィレンツェ・アルノ川河畔でドイツ軍との戦闘のち戦死した、元合衆国陸軍軍曹マスダカズオがたどった経路をそのまま旅し、フィレンツェに到りました。ローマ、チビタベキオ、グローセツト、リボルノ。

緑深いトスカーナの森で、遠くドイツに家族や友人を残したままのドイツ兵と、アメリカ僻地の収容所に家族を囚われたままの兵士は戦場で遭遇し、互いに銃をとって殺し合ったのです。

カズオは明治生まれの日本人である、父ゲンスケの影響を色濃く残していました。

一八八一年前後（明治中期）から一九三一年前後（昭和初期）にかけて、日本は集中的にハワイ、北米、南米、東南アジアへ数十万人規模の移民者を送り出しました。一時期にこれほどの規模で日本人が海外での永住の意志をもって海を渡ったのは、日本の歴史上、希有のことです。

マスダゲンスケの祖父母は、日本がまだ鎖国を解く前の時代に生きており、侍は腰に大小の刀を携えて「潔（いさぎよ）し」を無二の哲学として日々を送っていました。武道に長けていたマスダゲンスケは、礼節を尊び、武士道の魂を残していました。「家名を傷つけること」「恥」を何よりも嫌悪していました。

ゲンスケはそれゆえに日本軍によるハワイ真珠湾攻撃のその日、ただちに敵性人としてFBIに拘留され、長期間厳しい尋問を受けました。

イタリアの戦場で米国人兵士たちが極限の状態のなかで、神への罪におびえ、祈りながら暗黒の日々を送っていたのに対して、日系人兵士たちは「恥」をさらすことを何よりの恥辱として考え、「オトコラシク」絶望的な状況で戦火に身を投げ出していきました。しばしば両者の倫理や規範は激しく衝突しました。

私たちが出会う多くの日系人二世や三世たちの振る舞いのなかに、日本の明治の頃や、武家政治の時代に生きた日本人への郷愁のようなものを感じるのには、私だけではありません。千年も二千年も昔のことではなく、わずかに百数十年ほど前まで、私達の国のリーダーは些細な失敗や恥辱を理由に、自らの肉体を刃で刺し、絶命させるといった文化をもっていたのです。

フィレンツェ市街を貫くアルノ川は全長およそ百五十キロ。トスカーナ州東部の高地を源にまず北に流れ、フィレンツェ市街を西にむかつてピサへ、そして地中海へ注いでいます。中世、流通の基幹としてメディチ家を中心としたフィレンツェに莫大な富をもたらした、繁栄の川でもあります。

フィレンツェ市街の中心地、ベッキオ橋がかかるあたりの流れはゆったりとしていて、砂州で水鳥がのどかに遊んでいます。両岸に立ち並ぶ中世そのままのドームや教会、美術館のたたずまいに、きつとカズオも戦場にいることを束の間忘れたに違いありません。

私たちはアルノ川の川岸を終日さまよい、カズオ戦死の場所を探しました。しかし、私たちはついにその場所を特定することはできませんでした。

その日の夕暮れ、私たちはフィレンツェ郊外の森のなかにひっそりとたたずむ、米軍戦没兵士共同墓地へお参りしました。緑深い森のなかに広大な墓地が広がっています。チリひとつ落ちていない見渡すばかりの緑の芝生に、幾百、幾千もの真っ白い十字架が何列も整然と並んでいます。このような墓地はフィレンツェ、ローマ、アンツィオのほか、ヨーロッパ中の主な戦場に点在していて、それが政治的な配慮であれ、合衆国政府の戦没兵士に対する並々ならぬ思い入れに圧倒される思いでした。

この墓地を見下ろす高台に建てられた兵士の像に、私たちは二つの花束を捧げました。一つは大戦中戦死した、敵、味方すべての無名兵士のために。一つはマスダカズオのために。私たちが日本人が、繁栄の極みのなかで、さらにそれを不足と想っていること。生命あることを幸いに、限りある自然の蓄えを侵してまで更なる利便を求めることを、土中のあなた方はどうお思いでしょうか。

延々と続く十字架の列を見渡しながら、旅愁も手伝って、私はさまざまなることを考えました。

たとえようもないほど美しいフィレンツェの夕陽が、カズオの死に場所アルノ川を絶えることなく照らすことが、私は唯一救いのように思えました。

一九九一年の春、ロサンゼルスでマスダカズオのお兄様、増田正雄氏にお約束したカズオの足跡を追う私の旅は、ここでひとまず終止符をうちました。

「アンツィオ上陸記念博物館」維持会員として、恥ずかしい額の寄付をさせて戴いたことに、皆さまからの思いがけない感謝の気持ちをお伝えくださり、恐縮しています。

貴方が私からの寄付を快く受け取って下さったことで、今回の私のイタリア旅行は何よりも増して有意義なものになりました。

イタリア国民がどんなに経済的に困窮しても、百年、千年の尺度で遺蹟だけは守りぬく国民であることを、私は同行の藤川君から教えられました。

私の肉体や財産は死とともに消滅してしまいましたが、私の魂のひとかけらが日本を遠く離

れたアンツィオの博物館に、偉大なイタリアの歴史とともに引き継がれることは何という喜びでしょう。マスダカズオの死が決して無意味なものではなく、その死後もアメリカにのみがえって、大きな福音を人々にもたらしたことを思い起こします。

重ねて貴方がたの友情とご親切に感謝いたします。貴方から戴いた博物館の会員メダルは、子供たちにその意味を伝えるとともに、我が家で大切に保存することをお約束いたします。

一万キ口離れた広島から、アンツィオ上陸記念博物館のご成功と、パトリツィオ館長はじめ有志会員の皆様のご健康をいつもお祈りしております。

敬具

一九九七年五月二十一日

里吉賢司

署名

「日本国広島県広島市
里吉賢司様

前略

私は Amerigo Salvini（アメリゴ サルビーニ）といまして、アンツィオ上陸記念博物館戦闘研究記録センターの書記で、ボランティアでプレスオフィスの責任者を務めています。

この手紙はイタリア語で書いており、貴方に翻訳者探しというご迷惑をおかけすることを、まずお詫び申し上げます。英語を話したり聞いたりするのはある程度出来るのですが、書くのはそれほど上手くありません。

貴方が私どもの館長 Patrizio Colantuono（パトリツィオ コラントゥオーノ）に宛てたお手紙を拝見いたしました。

貴方が私達の博物館をとて評価され、素晴らしい贈り物を下さったことに対し、私達すべての同僚の名において感謝いたします。博物館、特に私はアンツィオ上陸・戦闘の生存者の証言を収集しています。もし故マスダカズオ軍曹の写真や資料を受け取り、私たちの博物館に特別なスペースを設け、展示することが出来れば非常に嬉しく思います。（中略）

広島に関しては、私は雅号が Mizu（サトウテツオ）という日本人の芸術家と二十年来の交友関係があります。彼はリエコという芸術家と結婚し、ローナという女の子がおります。Mizu（ミズ）の両親は（お母さんはミズシマといいますが）広島で被爆し、しばらくは生きておられましたが、それがもとで亡くなりました。この私の友人は、現在、絵画展を開くためフランスにおります。彼も私と同様、戦争の真つただ中の一九四四年に生まれました。

広島について、そして彼の両親について話るとき、彼は興奮し、同時に怒りはじめます。Mizuと私は言語、風習、生活習慣の相違を超えてすぐに理解し合い、兄弟のようになりました。彼が三年間住んだアンツィオを訪れるときは、私の家族と彼の家族は常に一緒にいます。

このことは、それぞれの民族が努力さえすれば、平和にそして友好的に生きていけるとい
う証（あかし）です。この友人は、今は東京の近くの、どこか我々の町アンツィオに似た海
辺の小さな町に住んでいます。

里吉さん、貴方が上陸記念博物館を訪れた日にお会いすることが出来なくて、本当に残念
でした。私はよくあそこへ行くのですが、アンツィオ旅行観光会社での仕事が忙しく、あま
り自由な時間がとれないのです。

私たちの企画に対する貴方の提案について、パトリツィオ館長および私たちすべての同僚
の名において感謝いたします。ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願い
いたします。

sayonara

一九九七年七月二日

Amerigo Salvini

署名 「

じじく

「合衆国陸軍軍曹 マスダカズオ 第三部、ミラノの魂柱」を執筆するうちに
に師走が目前となりました。続きは次号で。

本文「合衆国陸軍軍曹 マスダカズオ（一）イタリアへ」の抄文が英語、イ
タリア語に翻訳され、肖像写真とともにアンツィオ上陸記念博物館内に展示される
ことになりました。永遠の都・ローマを旅される機会がありましたら、参観してみ
てください。きっと歓迎して戴けることと思います。

本稿の執筆にあたり、国内外の多くの方々から貴重な資料や文献をお寄せいた
きました。厚くお礼申し上げます。
参照資料、文献は最終回巻末にて。